

# 農業技術短報

№54 2002. 1. 1  
三重県科学技術振興センター  
農業研究部  
畜産研究部

## 目次

| <所感>                                    | <トピックス> |  |
|---|---------|--|
| ○研究活動の使命                                | 1       | ○「最高級松阪牛」のクローン牛生産に成功 2                         |
| <研究成果の紹介>                               |         |  |
| ○飼料イネ専用収穫調製機械の効率的作業法                    | 3       | ○イチゴの炭そ病抵抗性高品質品種の育種法 12                        |
| ○サイレージ発酵品質を高める飼料イネ用ロールペーラの液剤添加装置        | 4       | ○野菜の機能性成分を増加させる栽培方法—モロヘイヤ編 13                  |
| ○トウモロコシ群落内の光環境からみたイチビの除草剤施用後の留意点        | 5       | ○野菜の機能性成分を増加させる栽培方法—トマト編 14                    |
| ○付着乳酸菌の事前培養液添加によるサイレージ発酵品質と牛の窒素利用率の改善   | 6       | ○カキ果肉中に含まれるポリフェノールについて 15                      |
| ○泌乳最盛期におけるイネWCSのTMR給与                   | 7       | ○日本ナシ新品種「福水」の特性と交配親和性 16                       |
| ○牛の尿量および尿中諸成分量を推定するインデックスとしてのクレアチニンの有効性 | 8       | ○緑化用ツツジとサツキの種間交雑による新品種「伊勢路紫」「伊勢路紅」「伊勢小町」の育成 17 |
| ○特産肉用鶏「東紀州地どり」の給与飼料の検討                  | 9       | ○小型乗用摘採機導入を前提とした中山間傾斜地茶園のテラス式整備法 18            |
| ○ポーラスコンクリートブロック護岸の早期緑化に適した充填土壌素材        | 10      | ○減肥技術の総合組立による現地実証 19                           |
| ○河口域におけるヨシ群落の窒素浄化量について                  | 11      | ○ヒヨドリによるカンキツ食害の実態 20                           |

## <所感>

### 研究活動の使命

畜産研究部 部長 水野隆夫

平成11年7月に「三重県科学技術振興ビジョン」が策定され、その冒頭に『科学技術とは、自然のしくみを解明し、その成果を体系化し人のために役立てていくという知的で創造的な活動です。科学技術は現代において社会のさまざまな分野に活用され、我々の生活や産業活動を支える重要な基盤の一つとなっています』と述べられています。

農業・畜産研究の基本は、土、水、空気、太陽などの自然条件下における生物（動植物、有用微生物等）の生理生態を捉えて、合理的に生産性や品質の向上をめざす科学技術研究であり、多くの研究成果が農業および畜産という産業の場面で活用されています。

しかし、農畜産業だけでなく他産業にもみられるように、長年にわたり生産性や効率性という視点から「経済性」を第一義に考えて研究活動を行い、成果を求めてきたことが大気、河川、海を汚し地球温暖化、酸性雨、オゾン層破壊、砂漠化、内分泌攪乱化学物質の拡散など数多くの地球環境の劣化を招いてきたとともに、自分が儲かれば良いという風潮を

生み自己中心型社会へ移行してきたことは否めない事実ではないでしょうか。そこで、これらの反省を踏まえて、農業と畜産の21世紀パラダイムは県民の健康、やすらぎ、憩いの空間であることを念頭に置き、自然循環系を利用した環境にやさしい持続的農畜産業および食品廃棄物等の肥飼料への利用によるゼロ・エミッションの実現をめざした社会的農畜産業の展開を見据えた研究活動が必要であります。また同時に、バイオテクノロジー・ハイテクノロジーを活用した斬新的な開発研究を進め、生活者・農畜産業者に快適で豊かな社会をもたらすとともに、それらの成果を活用した新産業創出の実現に寄与することが私たちに望まれています。

私たちは、県民の税金を研究資源として活動しているのだから効率的で効果的な研究を推進せねばなりません。そのためには、研究課題の計画・実行・評価を一連の活動として捉える研究戦略のもとで、価値ある成果を多く輩出して県民に「お返し」することを肝に命じて元気に研究活動に励んでいく所存でございます。